参加者の感想

学齢期に入るまでに、親の手伝いをしてなんでも覚えてしまう、子どもたちの姿に驚きました。休暇で遊びにきていたよその家の子どもも、現地ガイドさんや運転手さんも、土地の人に交じって当然のごとく仕事をしていました。そんなモンゴルの人びとの姿に、人の生きる原点をみました。

（渡辺敬子さん）

遊牧民は家畜のえさを求めて移動することで草原を根絶やしにせず、連れて歩く家畜が遊牧民の命をつなぐものであり、赤いもの（肉）と白いもの（乳）で健康を保っていたこと、乳を発酵させてヨーグルトや酒を造り、ビタミン類などを摂取していたことには驚いた。遊牧民はゲルと呼ばれる移動式の家に住み、巧みに自然と共生していたことを目の当たりにして感動した。

（猪股玲子さん）

⑥参加者全員でつくったボーズを夕食にいただいた

⑨ザイサントルゴイの丘から望むウランバートル市内

⑪エーデルワイス。今年は雨が少なく成長が悪い

⑦源泉。神聖な場所にかけられる青い絹布ハダグがかけられている

⑩ザナバザルの代表作「緑のターラー菩薩像」

⑫ザハ（市場）の乳製品売り場。肉も固まりで売っている

⑧ハルバルガス遺跡。わずかに都城壁を残すのみ

⑬羊と山羊を遠目からでも見分けるポイントは毛質と尻尾のかたち

み出す。無駄のない遊牧民の営みに草原に寄り添い生きる知恵を学んだ。取り分けた肉はホルホグ（焼き石料理）に変身。調理に使った熱い石を握ると健康に恵まれるという。④⑤⑥⑦

■8月11日（金）

ツァガンスムからブルドへ移動。途中、ウイグル時代の都城跡ハルバルガス遺跡に立ち寄る。目的地にアタリをつけて、オフロードをひた走った。遺跡には見学する人影もなく、崩れそうな城壁が残るばかり。しかし、外部と交流する時代を築き、自らの文字をつくったウイグル遊牧民の功績は、遊牧文明史のなかでも大きいという。ブルドではラクダに乗って砂丘を散策。この旅最後のゲル宿泊で夜を迎えた。⑧

■8月12日（土）

ウランバートルに戻る。社会主義時代の記念碑が建つザイサントルゴイの丘から、新旧高層の建物がひしめく市内を遠望する。その後、ボグド・ハーン宮殿博物館へ。活仏にして皇帝であったボグド・ハーンの冬の宮殿跡を博物館にしており、仏教美術のほか彼ゆかりの品々が展示されている。運良く「大モンゴル展」のもうひとつの目玉資料、シャラブの絵画「モンゴルの一日」を鑑賞することもできた。夜、劇場で喉歌や馬頭琴などの民俗芸能を楽しむ。⑨⑩

■8月13日（日）

チンギス・ハーン像テーマパークに足を伸ばしたあと、市内に戻りザナバザル美術館へ。活仏にして政治家でもあった彼と彼の一派が制作した仏像ほか、仏教美術を鑑賞。その後、スレン先生が初代館長を務めた国立博物館へ。歴史と民俗部門の展示があり、モンゴルの全容を概観するとともに旅を振り返ることもできた。夕方、ザハ（市場）とデパートを見学。いずれの食品売り場にも、家庭でつくられるような乳製品が売られているのが印象的だった。⑪⑫

■8月14日（月）

早朝、ウランバートルを出発。帰国。